

# 戦国期城郭の空間構成

Composition of Space in Castles in the Sengoku Period

千田嘉博

- ① 城跡から考える歴史
- ② 城郭における軍事の普遍性と読みとりの限定性
- ③ 城郭のイメージ
- ④ 築城祭祀と曲輪の造成技法
- ⑤ 陣城の空間構成
- ⑥ 城攻めの包囲陣
- ⑦ 国人領主の山城に見る空間構成
- ⑧ 閉ざされた城内 / 開かれた城内
- ⑨ 籠城の実態—兵舎を見つける—  
おわりに

## [論文要旨]

日本における城郭研究は、ようやく基本的な所在や遺跡概要の情報を集積する段階を終え、そうした成果をもとに新しい歴史研究を立ち上げていく新段階に入ったと評価できる。従来の城郭研究は市民研究者によって担われた民間学として、おもに地表面観察をもとにした研究と、行政の研究者による考古学的な研究のそれぞれによって推進された。しかしさまざまな努力にもかかわらず地表面観察と発掘成果を合わせて十分に歴史資料として活かしてきたとはいえない。

城郭跡を資料とした研究を推進するためには、地表面観察から城郭の軍事性を歴史資料化することと、発掘成果から城郭の内部構造を歴史資料化することを一貫して行い、分析することが必要である。そして発掘成果によって改めて中世城郭の実像をとらえ直すことが大切である。

そこで本稿では、発掘で内部構造が判明した中・小規模の城郭遺構を軸に、地表面観察、文字史料をも合わせた学融合的検討を行った。検討の対象は、築城祭祀、塁線構築技法、陣城、包囲陣、中小規模の山城の内部構成、兵舎など多岐におよぶ。いずれも城郭跡から歴史を読み取っていくのに基本になる視点といえる。地表面観察でわかる情報から発掘成果まで学融合的に一貫して検討することで、城郭跡のもつ資料性をさらに高めることができる。本稿はそうした新しい研究方向を指向した試みである。

## ①……………城跡から考える歴史

城郭研究は、地表面観察を主軸にした位置情報の集積や概要確認といった基礎資料の収集段階を終え、城郭跡を資料にした歴史研究を実現する新しい段階に入ろうとしている〔千田2003a〕。そこで地表面観察による成果を継承しつつ発掘成果から戦国期城郭を分析し、考古学の成果に基づく新たな戦国期城郭像を提示するのが本稿の目的である。

これまで市民研究者が主体になって城郭の地表面観察成果である「縄張り図」を蓄積してきた。日本列島全域におよぶ「縄張り図」を活かしつつ、さらに各地で積み重ねられている城郭の発掘成果を資料としていかに歴史研究を進めていくのかが、城郭研究が直面する大きな課題である。

今日の城郭研究は領主論や大名権力論の視点だけでなく、社会論、都市論、戦争論などといった多様な視点から進められている。しかし1980年代には地表面観察による城郭研究が、城郭の軍事面に集中しているという批判があった。すでに指摘したように地表面観察は唯一の城郭研究方法ではなく、土木工事の最終段階をつかめるという地表面観察調査の特性を考慮すべきである〔千田1991・2000〕。

それらの点から考えれば地表面観察にもっとも期待するのは、城郭の軍事面の把握を歴史を考える資料へと「変換」する分析方法を確立していくことである。城郭は多くの機能をあわせもち、そのいずれの機能の解明も重要である。しかし堀や土塁、くふうした出入口など防御のために城が備えた軍事機能は、人類がつくったさまざまな施設のうち、城郭がもった本質的特性であった。

これを解明することは、城を理解するために欠くことができない。しかしただ軍事機能を把握し解明することに留まったのでは、殺傷技術の進歩を城跡に確認したにすぎない〔千田2002〕。どこに、どのような城があったのか、大規模な堀や土塁か、あるいは小さなものか、ひとつひとつ城跡の実態をつかむことの大切さはいまでもない。そうした上で指摘したいのは、軍事面を含めてどんな城郭であったかをつかむことはすべての出発点であり、基礎作業ではあっても、決して最終目的ではないということである。

だからこそ城郭が備えた軍事技術の共通性や分布・発達をつかんだとして、そこに日本中世の歴史を解明するための何を讀みとるかが問題なのであり、城と向きあう研究者の意識が問われるのである。城郭の防御施設は直接的には殺傷技術のあり様しか語らない。第2次世界大戦中の軍による城郭の研究であれば、殺傷技術の発達を把握することで、研究の目的は達成されただろう。

しかし歴史研究として城郭と向き合うわたくしたちは、たとえ軍による研究と同じ防御施設をあつかっているとしても、そこに歴史資料としての「変換」を不断に意識し、模索しつづけることで、これまでとは異なった歴史研究としての城郭研究を確立していくことができるはずである。日本列島の至る所にこれほど数多くあり、しかも個性豊かな城郭跡を、歴史を考える資料として意味あるものにすることは、中世史研究を広げていくことにほかならない。

それは単に城郭跡だけを資料化するというだけではなく、村や都市、生産や流通といった地域の遺跡群とその動態とあわせて検討し、また文書や絵図といった多様な史料群とあわせて検討していくことで、さらにその可能性を広げる。こうした視点は従来の研究の枠組みを止揚する「中世総合

資料学」へとつづく。

中世総合資料学における城郭研究の位置づけを考えた場合、城郭の軍事面からの資料化は、地表面観察から達成できる城郭跡の資料化として重要であっても、それだけでは充分ではないことも明らかである。城郭の空間構成（曲輪内部の建物や園地の配置、生活道具や相互の組みあわせなど）を軍事面の資料化とともに推し進めることが必要である。このためには発掘成果が決定的な位置を占める。

地表面観察による資料化は、民間学として市民研究者が担い、発掘調査は行政機関に所属する考古学研究者が担ってきたため、残念ながらそれぞれが明らかにしてきたものを一貫した資料として分析することはなかなか達成できていない。わたくしも一貫した資料化を試みてきたが〔千田2003b〕、本稿もそうした試みのひとつである。

## ②……………城郭における軍事の普遍性と読みとりの限定性

さらにふれるべき問題は少なくないが、わたくしがこれからどのような枠組みと意図をもって城郭研究を重ねていこうとしているのか、大きな方向性は示し得たと思う。発掘成果をもとに考えていくにしても、地表面観察の成果を古い研究手法による過去のものとするのではなく、それをひとつづきに活かすことが重要であること、地表面観察にもとづく研究ではとりわけ軍事性の資料化に意義があることを述べてきた。

城郭の軍事性の資料化については、わたくしはこれまでもこだわって研究を進めてきた。城郭研究を進めていくのに、軍事性の解釈や評価を避けるわけにはいかないと思うからである。そして城郭の軍事性を資料へと「変換」することは村田修三による大和の小規模城郭の検討以来〔村田1980〕、しだいに確かなものになりつつある。しかしそうした軍事性の読みとりの普遍性や限界については議論が不足している。この点は現在の城郭研究の大きな問題点である。

個々の防御施設のくふうがまとまって、最終的には城郭全体の防御構成のあり方が縄張りに収斂した。そして城郭のもった軍事性を資料化する具体的な視点として、縄張りに結実した城のかたちの違いや変化を読みとることを進めてきた。歴史研究としての城郭研究の一端を、わたくしはそうしたものとして行ってきた。

ところが城郭の軍事性をつかみ、さらにそれを歴史研究の資料として「変換」という2段階構造の研究方法で明らかにできる何らかの歴史があり得るとして、その読みとりの根拠として用いる、ある防御プランが出現したことの解釈は、どれほど普遍性をもち、法則性を備えたものとしてよいのだろうか。その部分を担保しなければ、ある城のかたちの変化の読みとりでは真実であったことが、同じかたちの変化をした別の城の読みとりでは誤っているということが否定できないからである。

そこで世界各地のさまざまな時代の城郭や防御施設が、どのような変化をしたのかを実際に確認していくことを、日本の城郭をとらえることとあわせて行ってきた。日本の城郭の発達の世界の城郭や防御施設と比較してどんな特色をもつといえるのか、そして日本の城郭研究が積み上げてきた防御遺構を歴史資料としていくことは、どこまで普遍性や妥当性をもつといえるのかを、極めるためである。

もとよりこのような大きな問題に答えを出すことはまだできないが、防御施設そのものの展開を把握して法則性を導くことと、それを資料とした歴史解釈とを同一視することができないことは、現時点でもはっきりいうことができる。

人類が世界の各地につくり出したさまざまな時代の城郭や防御施設を瞥見すれば、たちまち共通した防御プランが消長をくり返したことに気がつく〔千田2003b〕。そうした点では世界の城や防御施設の発達の法則性を、相互の関連性の有無や絶対年代の関係とともに明らかにすることはできる。しかしある防御施設の出現や発達は、必ずしもその背景にあった政治的・社会的な構造の同一性を意味しない。

たとえば日本列島では16世紀後半に出現した外柵形（外側に入出口を囲う城壁を張り出し、門が正面から見たとき側面に向けて位置した）の入出口は、日本海を挟んだ対岸の沿海州では10世紀には遅くとも出現していたし、また南半球のニュージーランドでは19世紀になって出現していた。

いずれもある防御プランという点ではまったく同じものではあったが、だからといってそれぞれの地域の歴史に日本列島の16世紀に起きていたことがあったのではないことは明白である。つまり城郭のかたちの変化の示すものを読み解く作業は、ある地域に固有の政治的・文化的枠組みを前提として、その地域の政治的・社会的構造の変化を読む指標になるものと考えなければならないのである。

だから城郭のかたちとその変化を資料として読み解く作業が導くものは、地域固有のものに留まるのである。城郭の構造変化そのものは人類史上のグローバルなものとして法則性を与えられても、それは個々の地域の歴史を同一視する歴史認識を導くものではない。こうした特質は世界の城郭と日本の城郭とを比較してはじめて浮き彫りになる。そして世界に出現した同一の防御プランに対する多様な歴史資料としての読み取りを比較することは、日本列島における歴史の特性と城郭資料化の妥当性を検証することにもなるだろう。

### ③……………城郭のイメージ

中世の城郭には遺跡としての城郭の本格的な研究がはじまる前に、すでに文字史料をもとにした確固としたイメージが存在した。たとえば臨時に築いた城郭に対してだけでも、陣、砦、切寄など、さまざまな呼称がある。城郭は学術用語としては防御機能をもった施設の総称である。防御機能の有無がほかの施設と城郭とを区分する指標である。

ところで城郭とはいっても、先に見たように呼び方は複雑である。まず城館の占地によって分類する方法がある。山城は丘陵・山岳に占地した城郭を指す。山麓との比高差の大きくないものは平山城あるいは丘城と呼ぶ。平地の城郭は平城で、このうち小規模なもの、あるいは防御施設が軽微なものは館である。

また機能や状態に着目した分類もある。たとえば、防塁あるいは阻塞は、土塁や石塁、堀による長く伸びた防御線をいう。いわゆる長城である。館に基礎を置きながら城との中間形態にあるものは、丘陵上・平地といった占地の如何を問わずに館城と呼ぶ。城のうちで軍事機能が極端に高く、あるいは政治・居住等の機能が低いものが、砦や陣・切寄である。しかし平城や館はたしかに地形

をもとにした分類を基礎にしているが、そこには軍事機能だけでなく、政治・居住・宗教といった機能をもつことも内包しており、単純に地形による分類と機能による分類とが別個のものとしてあるわけではない。

こうした城館にかんする分類は、長い城館研究のなかで概念化され体系づけられてきたものである。もちろんこれら呼称に相当した城館は存在し、千差万別の城郭をとりあえずいくつかのタイプに分けて考えられることは、研究を進める上でも有効である。しかしこれらの呼称の多くが、江戸時代以降の研究や位置づけによってイメージされてきたことにも注意しなければならない。1970年代以降、数多くの城郭が発掘されるようになり、従来の城郭像と発掘された実態との間に大きな差異が認められることも少なくない。そうした意味ではなにが館で、なにが砦なのか、発掘成果にもとづいて改めて定義していく必要があるだろう。そこでここでは全体像をつかみやすい中・小規模の城郭をとりあげて、築城の様相から内部の空間構成の特質までを読みとっていきたい。

#### ④……………築城祭祀と曲輪の造成技法

山城の築造では、とうぜんその設計があったはずである。城郭の設計を縄張りと呼ぶのは、築城予定地に縄を張って普請の目安を示したからだという。削平・盛土の工事に入る前には、築城に伴う祭儀を実施した。軍神の勧請や歛立ての儀式であった。発掘でも輪宝を描いた土師皿を収めた土坑等が検出されている。

たとえば広島県大和町の行武城では、主郭東端で南北45cm・東西47cmの方形の土坑を検出した(図1-1)。内部には土師皿30点以上、開元通宝などの銅銭23枚以上が含まれていた。土師皿は合わせ口や重ね合わせたものがあり、銅銭も土師皿の内面に密着したものがあったことから、本来、木製机などの上に並べたものが、落ち込んだ状態と推測された[小都・志田原ほか1984]。

また群馬県下仁田町の杣瀬Ⅲ遺跡では、中心曲輪の中央に掘られた円形土坑から、内面に阿弥陀如来の梵字と輪宝を墨書したものの4点を含む土師皿24点が検出されている。土師皿には有機物の付着が認められるものがあり、儀礼ののちに五穀などと共に土坑に投棄されたと推測できる[大賀ほか1994]。これらは城築城祭祀の一端を示すものと考えてよいだろう。なおこの遺跡については寺院跡とも考えられるが、堀切りを配して明確な防御力を備えており、築造主体が宗教勢力であっても城郭の範疇で捉えることができる。

山城における曲輪の造成は、平らな空間を確保するために、高い部分を削平し、自然地形に従って傾斜していく部分に、人為的な盛土を施すことで行われた。具体的にどのような工事が行われたのか、典型例を見てみよう。福島県小野町に所在した<sup>ししくぼ</sup>猪久保城は、14世紀末から15世紀初頭に機能した山城であった[大下・飯村ほか1994]。全体構造は次章で検討するとして、ここではまず盛土について述べたい。

猪久保城の主要な曲輪のひとつであった5号平場では、曲輪造成のための特徴的な工事を検出した。曲輪東側の縁部の長さ約16m、幅6～4mにわたって、自然に傾斜した地山面をあらかじめ階段状に削平し、その上に盛土を行っていた。地山を階段状に整形したのは盛土部分を安定させ、崩落するのを防ぐためだと考えられる。この工事により、傾斜角度51°という登坂困難な切岸を形成し

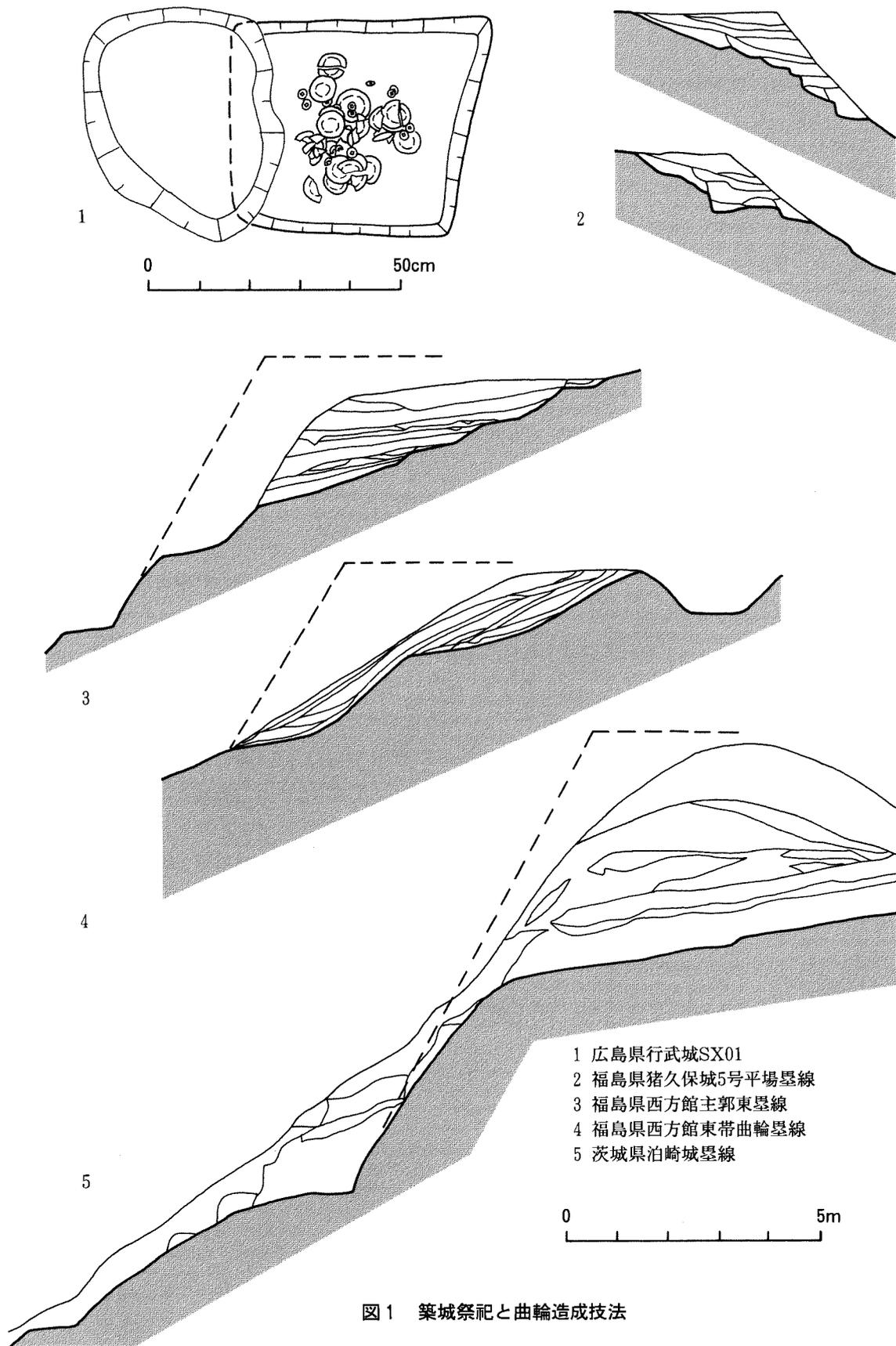


図1 築城祭祀と曲輪造成技法

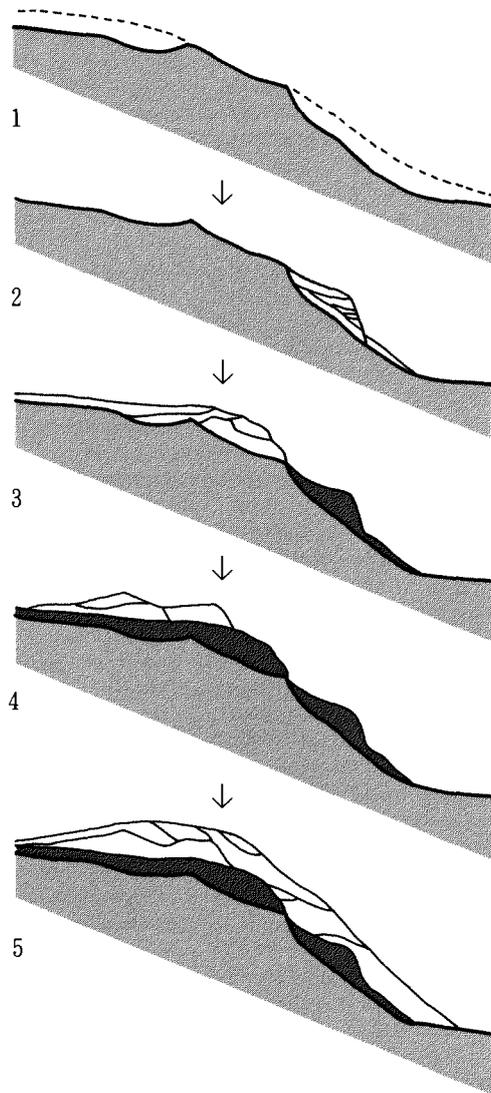


図2 兵庫県釜屋城の壘線構築順序

たとともに、壘線際の通路を曲輪内に生み出していた（図1-2）。

同じく福島県三春町に所在した西方館<sup>にしかた</sup>では、主郭および帯曲輪の造成に際して大規模な削平と盛土が行われたことが判明した〔仲田1992〕。このうち主郭の東側斜面では、検出しただけでも約3mの高さの盛土を行い、本来、盛土は5mにおよんだと推測された。この工事によって主郭の平場の約半分を確保した。そしてここでも盛土に先立って地山を階段状に加工していた（図1-3）。

さらに主郭をとりまいた東側帯曲輪の外にあった堀切りの対岸土塁基部の造成にあたって地山を階段状に加工したことを観察できる。ここでもまず斜面を大きく階段状に加工して基礎をつくった。そしてこの上に土塁を構築していた。復原される壘線外側の傾斜角度は、 $55^{\circ}\sim 60^{\circ}$ におよんだ。

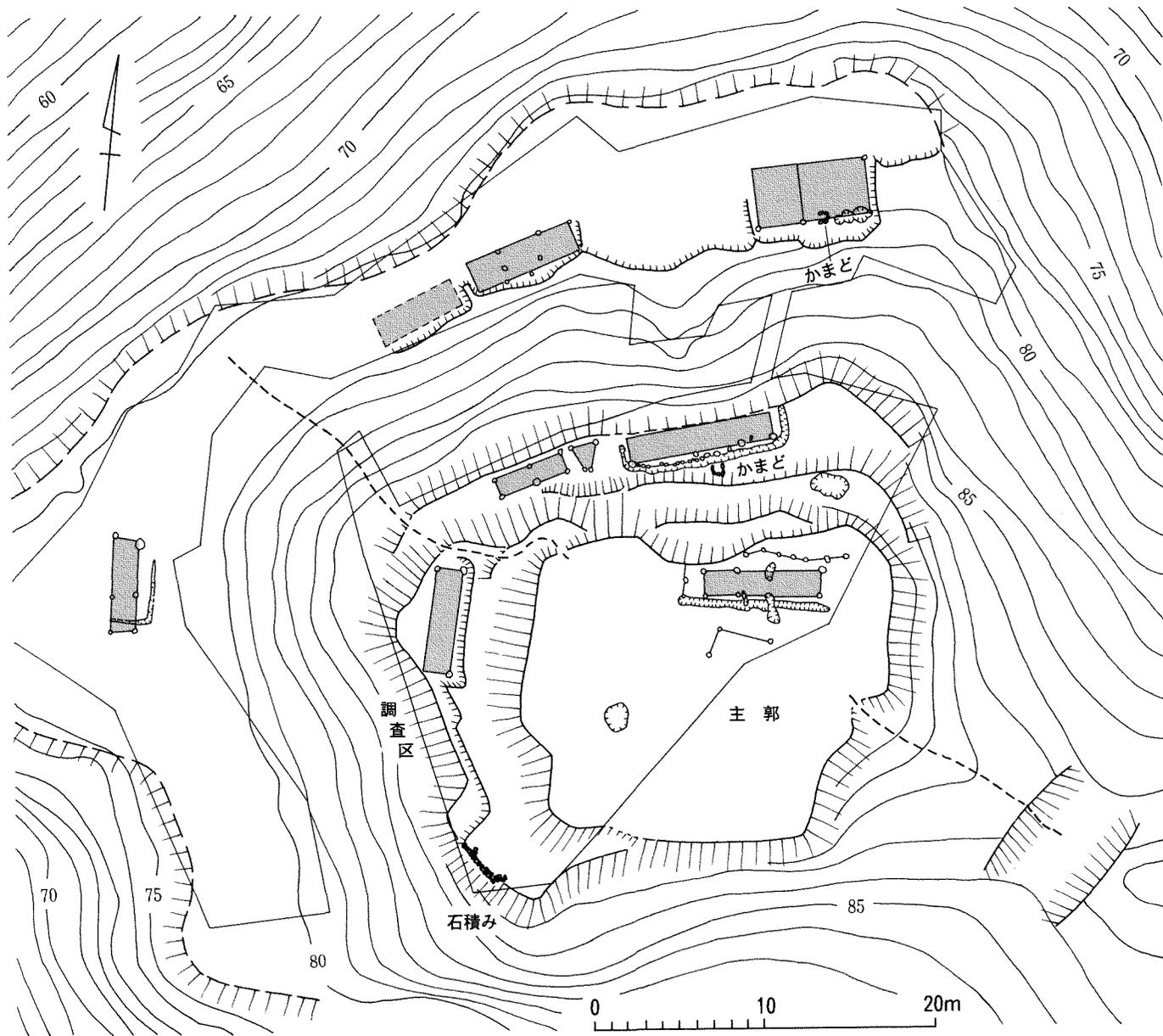


図3 広島県北谷山城（〔奥田ほか1986〕に加筆して作図）

西方館は16世紀後半に機能した山城であったが、猪久保城と共通した造成技法（切岸、あるいは土塁基底部の築造法）が確認できるのである。

こうした造成技法は、とりあげた東北地方だけでなく各地で確認することができる。戦国期には全国的に使用された普遍的な構築方法であったといえる。たとえば茨城県茎崎村に所在した16世紀の泊崎城では、塁線縁部で地山を階段状に大きく削りだし、できあがった段を土塁外面の基礎として盛土を行った〔平松ほか1980〕。土塁（切岸）の外側傾斜角度は60°に達したと復原できる（図1-4）。

兵庫県三田市にあった16世紀後半の釜屋城では、尾根つづきなど傾斜の緩やかな部分では、まず溝を曲輪の形に沿って掘削し、それを外側の基準線として土塁を構築した。塁線外側（切岸）の傾斜角度は、少なくとも45°であった。そして比較的傾斜のある部分では、まず地山を斜めにカットしたのち、切岸と土塁を造築する部分に階段状の盛土を設け、それを足場にして曲輪端部の盛土と土塁を構築した〔兵庫県教委1983〕。やはり曲輪造成のための盛土技法は同じといってよい（図2）。

曲輪の盛土造成にあたっては、すでに確認したように工事基盤面を階段状に加工することで盛土のすべりを止めただけでなく、可能な限り土を叩き締め、あるいは版築状の工法を用いることで堅固なものにしたと考えられる。完成後は、外側斜面の切岸に芝などの植栽を加えることによって、雨水による壁面の浸食を防ぐことが一般に行われたであろう。

さらに壁面維持のために外壁面（切岸）や土塁がある場合は内壁面も合わせて、裾部や切岸面に2段～数段の簡単な石積みを施すことがあった。西日本の山城では16世紀になれば広くこうした裾固めの石積みを使用した。広島市東区温品に所在した16世紀半ばの北谷山城では、主郭まわりの帯曲輪の切岸に石積みを使用した（図3）。地山に階段状整形を施したのち、奥行き25～50cm、幅15～30cmの割石を2～3段に積み、85°の角度の段をつくった〔奥田ほか1986〕。

広島市安佐北区高陽町に所在した恵下山城の主郭塁線では、切岸面に川原石を半ば含む高さ40cm程度の石積みを用いていた。そしてこの石積みのすぐ後ろには柵が組み合わされたことも判明した。この部分では比高約1mで約90°の角度で立ち上がった石積みと背後の柵で、曲輪を守ろうとしたことがわかる〔小都ほか1977〕。同様の例は広島県安佐南区沼田町に所在し、16世紀後半まで機能した伴東城などでも主郭や帯曲輪の切岸に見られ〔広本ほか1989〕、枚挙にいとまがない。

## ⑤…………陣城の空間構成

具体的に居住や防御の場となった空間・曲輪をどの程度丁寧に平らにするかは、その城の性格と深く関わった。16世紀前半の絵画資料『真如堂縁起絵巻』（真正極楽寺蔵）は、寺院の本堂などから部材を奪い、山の上に置盾と幔幕とを並べて塁線を決定し、簡易の櫓門と逆茂木とを備えた臨時の砦を描く。

こうした戦いの中で短期間臨時に用いた砦や陣では、大規模な削平や盛土を行わないこともあったであろう。伝承や地名に城郭や陣としてのなごりがあっても、このタイプの城では、発掘調査で具体的な痕跡を確認することはきわめて難しい。

逆に、陣であっても一定期間にわたって使用した場合や、急傾斜で、ある程度の削平が不可欠な場合は、一定規模の普請工事を行った。よく知られている事例は、島根県大和村の尼子氏陣所跡で

ある[振井1992]。ここは江川の渡河点を控えた移動中の軍勢集結場所として、1540年代から1560年代にかけて尼子氏と毛利氏が使用したと考えられる。

発掘と詳細な地表面観察の結果、山頂部に城郭部をもち、周辺の派生尾根上に削平段を連ねた陣の様相が明らかになった。発掘調査を行ったのは城域の端に近い部分で、尾根上の斜面に削平段を造り出していた。段の裾部には雨落ち溝があり雨水や土砂の流失に備えた。いくつもの小規模なピットを確認しており、平面プランは不明だが簡易な住居施設を構えたことはいかかえる。

陣城の平面構成の基本的な性格については、多田暢久が大將格の有力武將が使用した普請の整った本郭部と、一般の兵士が使用した駐屯部に区分でき、それを一体的に築いたことに特色があると簡明にまとめている[多田1989]。時代はやや下るが、1637年(寛永14)の島原の乱での原城攻めで、原城を包囲した幕府軍の細川忠利本陣は内部の空間構成を絵図で確認することができる(永青文庫蔵「有馬陣屋」)。

それによれば四角く削平した本郭部は、柵を巡らした中心に御座之間・御次之間・台所・馬屋が建ち、塁線に沿って物見櫓や番所を備えていた。また永青文庫蔵の「肥前有馬御陣之節御陣小屋地割絵図」によれば、細川陣は、先に見た忠利の本陣を核に、360m×630mの範囲におよぶ外郭部をもち、家臣の陣小屋を配置した。外郭部には大きな「御勢たまり」が2つあり、兵員・物資の集結に備えた空地を広くとった。近世にも戦国期の陣の構成が受け継がれたことがわかる。

こうした平面構成は計画的な発掘調査が進む佐賀県の肥前名護屋の陣とも共通しており、肥前名護屋の陣屋は石垣を用いるなど恒久的施設の面をもったが、基本的には陣城であったことを改めて裏付ける[田平・多々良ほか1983]。さらに肥前名護屋の陣群でも、本郭部の周囲には軍勢の駐屯や物資集積のための広大な曲輪が伴ったことが明らかになってきており、この点も戦国期の陣城と共通した[宮武1997・1998]。

## ⑥……………城攻めの包囲陣

陣のなかでも攻城戦に伴って、城を包囲するために築いた包囲陣は、考古学ではほとんど注目されていない。遺跡として認知している城跡ではなく、その周囲を探索し、しかも部分的にみれば城としての完結性に乏しい遺構を、全体のまとまりの中で包囲陣と評価しなくてはならないからである。

しかし大規模な普請を行った事例も多く、後述するように戦国期には広く築いていた施設であったから事例は次第に増えるであろう。文字史料によって構築年代を明確に特定できることは、遺構・遺物の指標として価値が大きく、さらに文字史料から考えてきた中世の戦いの実態を、考古学の立場から検討するためにも重要である。ここではそうした城を封鎖するために築いた陣を包囲陣としてとりあげる。

戦国期の城と包囲陣の全貌を、考古学的な調査によって解明した先駆的な事例が北九州市の長野城である。北九州市教育委員会と長野城を考える会の精力的な調査によって、長野城を取り巻く周囲の丘陵上に壮大な包囲陣が存在したことがわかってきた(図4)。長野城に向かった周囲の尾根筋には、長野城を包囲する陣が連なった[栗山2000]。

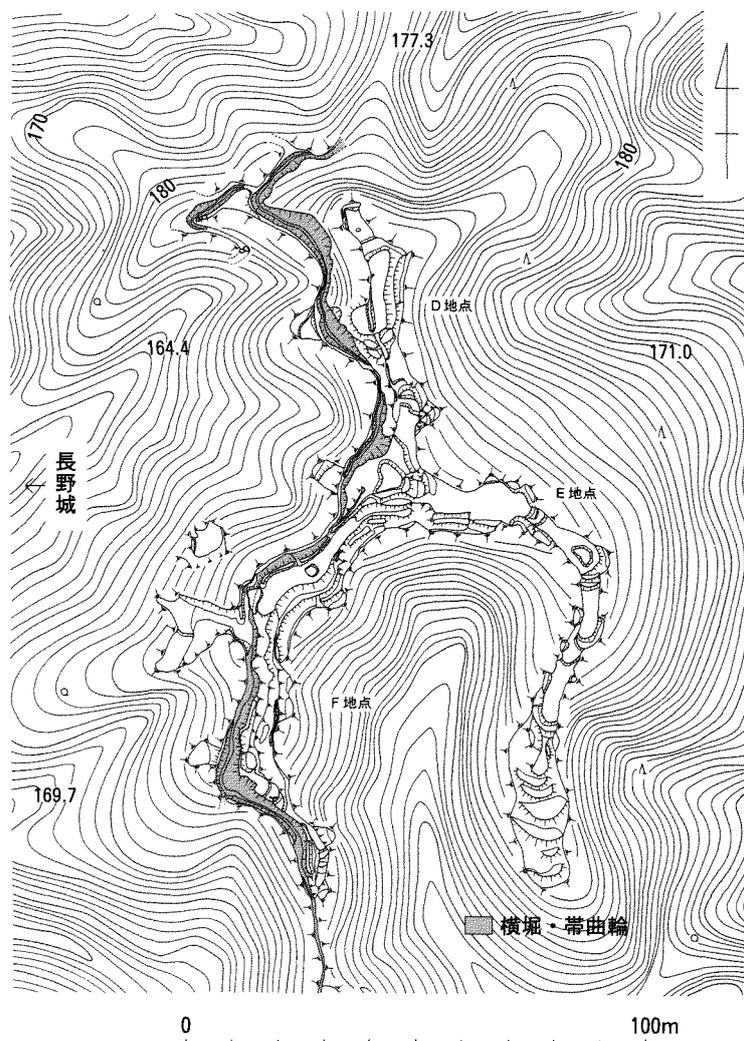


図4 福島県長野城包囲陣（部分）（[栗山2000]に加筆）

一連の遺構には尾根筋を断ち切る堀切りがごくわずかしがなく、通常の城とは大きく異なった。長く伸びた尾根筋そのものを城域に見立て、線状の細長い城域を構成したのである。そしてこの陣は尾根筋に沿った長大な堀を一貫して長野城側に向けるという特徴的な構成から、城側が築いたものではなく、城を包囲した側が築いた陣、包囲陣と判断できる。

城のある尾根筋から谷を挟んだまわりの尾根筋に長大な陣を構築することで、城への交通を完全に遮断し、人や物資の流入出を完全に阻止したことがわかる。それは同時に城からの出撃を困難にすることでもあり、結果的に攻守双方の戦闘による人的損害を大幅に減少させるものでもあった。

長野城側に設けた包囲陣の横堀の規模は地形や場所によって大小があった。発掘した横堀では、

上端幅4m程度で、断面形状は箱堀であった。また堀の外側には対岸土塁を積んだことが判明した。包囲陣の曲輪内には竪穴建物や建物基壇などがあり、城から見通すことができない反対側の尾根斜面には小屋掛けの場と見られる段々の曲輪群を設けていた。

長野城では戦国期に1565年（永禄8）と1568年（永禄11）の2度の戦いが知られている〔有川1995〕。1565年の戦いでは大友氏が約2ヶ月にわたって長野城を攻め、長野城の里城（山麓の居館）も陥落した。山城の長野城は、長野氏が大友氏に従うことで落城は免れたが、包囲陣はこの戦いで大友氏の軍勢が築いたと考えられる。

わずか3年後の1568年、今度は大友氏の追い落としをはかった毛利氏が長野氏を攻めた。長野城主と有川が推定する長野筑後守は混乱の中で殺害され、長野氏の主たる抵抗は、地域の住民とともに、長野城よりさらに高所の山城で行われた。しかしこれらの山城も次々に攻め落とされ、長野城も自落か落城したと推測される。

長野氏は長野城をこの戦いで主たる防御の拠点に選ばなかった。それは1565年の戦いで厳しく包囲されて軍事拠点としての弱点を露呈したことが大きな理由であろう。そして現状で包囲陣の遺構を地表面から明瞭に観察できることからみても、当時は包囲陣の堀や土塁が攻撃側によって簡単に再利用可能なまま遺存していて、長野城に籠城することは絶望的な選択であったからである。1568年の戦いの経緯からも包囲陣の構築は1565年に限定してよい。

包囲陣を築いて敵対する勢力の軍事拠点を攻めることはヨーロッパでも古くから知られている。たとえばカエサルが紀元前52年に攻めたフランスのオビドゥム（要塞都市）アレシアを包囲した陣が著名である（カエサル『ガリア戦記』）。アレシアの包囲陣は堀と土塁によって内側に要塞都市を封鎖しただけではなく、要塞都市への援軍に備えて外側にも堀と土塁を築いた。さらに内と外からの攻撃をより効果的にくい止めるため、撒き菱・落とし穴・逆茂木の列を加えていたことは発掘でも確認されている〔Reddé・Schnurbein et. 1995〕。カエサルの包囲陣は別の場所に原寸大で復元している〔千田1999〕。

戦国期の日本でも城攻めに際して包囲陣を築くことは特殊なことではなかった。たとえば1669年（永禄2）に織田信長は愛知県の岩倉城を攻めた。そのようすを『信長公記』は「町を放火し、生城になされ、四方しし垣二重・三重丈夫に仰付けられ、廻番を堅め、二・三ヶ月近く陣にとりより、火矢・鉄炮を射入れ、さまざまに攻めさせられ」と記す。

すでによく知られた例では羽柴秀吉による一連の包囲陣構築がある。1579年（天正7）の兵庫県三木城攻めの多重土塁線包囲陣、1581年（天正9）の鳥取城攻めの包囲陣、1582年（天正10）の岡山県の高松城攻めの包囲陣、1585年（天正13）の和歌山県太田城攻めの包囲陣などである。高松・太田の事例は一般に水攻めと特に呼ぶが、包囲陣の目的をより貫徹するために、水を引き込んだのであって、性格に大きな違いはない。

1587年（天正15）に肥後国衆一揆が立て籠もる熊本県の田中城を、小早川秀包と安国寺恵瓊が攻めた戦いでは、包囲陣を描いた当時の絵図「刃春・和仁仕寄陣取図」が残る。絵図には田中城を二重に囲い込んだ柵列が見られ、突入のための井楼が城に迫る。遠く大坂城から督戦した豊臣秀吉も「重々堀・雲雁以下丈夫相付、干殺二成候敷」と指示したように、嚴重な包囲の状況を手に取るように知ることができる。

同様の絵図は1590年（天正18）の豊臣秀吉による小田原城攻めに際してもつくられており、大規模な惣構えを備えた小田原城と城下を、さらにその外側の包囲陣で完全に封鎖したことがわかる。

1599年（慶長4）に島津氏の家臣であるとともに豊臣秀吉の直臣でもあった伊集院幸侃を島津忠恒が伏見で惨殺した。このため幸侃の子、伊集院忠真は鹿児島県都市の志和池城に籠城して島津氏の軍と戦った。庄内の乱である。島津忠恒は志和池城を封鎖するため、森田陣を核とした東西2kmにもおよぶ長大な包囲網を構築した（図5）。遺構は断続的に地表面から観察でき、都城島津家に伝えられた絵図と遺構を合わせることで全貌の復元が可能である〔千田1998〕。河川には網を張って船舶の航行を防ぎ、間を柵で結んで、城を完全に封鎖した。10月からの包囲によって翌1600年2月に志和池城は兵糧がなくなり降伏している。

a～bまでが攻め手であった島津の森田陣主体部で、大淀川の河岸段丘上に展開した。御陣とあるのが、島津忠恒の本陣であった。cは本来、北側のdとひとつづきの志和池城の外郭であったが、島津方に攻め落とされて攻め手の陣に転用された。eは「新城」と呼ばれている。ここも志波池城外郭の一部分に含まれたが、堀と土塁を複雑に重ねた強固な防御線を張り巡らしており、庄内の乱に備えて志和池城側が急速大修築したことがうかがえる。「新城」という呼称ともまさに合致する。fは台地つづきの北東側から志和池城を包囲した島津方のもうひとつの陣群であった。

いくつかの事例を見てきたが、これらは戦国期に数多く築かれた包囲陣のごく一部にすぎない。戦国期の城攻めについては、こうした包囲陣の実体を明らかにすることで、実像に迫ることができるに違いない。

## ⑦……………国人領主の山城に見る空間構成

数多くの山城の内、大多数を占めたのは中小規模のものであった。そうした山城の発掘では、検出した建物遺構の機能を正確に知ることは難しい。もちろん建物に伴った遺物や遺構の組み合わせから機能を推測していくわけだが、2間×3間といった単純な平面プランから、個別の機能を考えるのには限界がある。そこで発掘成果を『検地帳』の地名と対比して城郭中心部の建物群の機能を追求できる希少な例を考えてみたい。

高知県春野町に所在する芳原城は、低湿地に囲まれた比高30mほどの丘陵に占地した。この地域の国人領主吉良氏が創築し、天文年間には本山氏の城として整備された。芳原城は出土遺物から16世紀中頃までが盛期であり、後述するように1589年（天正17）の長我部氏の検地では城域すべてが「下々定芝荒」となって遺跡化していた。芳原城のすぐ北の丘陵には捨ヶ森城があり地表面観察で横堀が認められるので、16世紀第3四半期まで使用したことがわかる。こうしたことから南北に並んだふたつの城は16世紀後半には同時に使用していたものと思われる。城のつくりとしては芳原城がより整っており、主城と位置づけられよう。

芳原城は5度にわたって発掘調査が行われ、多くのことが明らかになっている（図6）。最初に山麓部の日常の居住機能を担った曲輪に接した低地の調査が実施された〔宅間・出原1984〕。城の周囲の低湿地からは1493年（明応2）銘をもつ「奉転読大般若経」護符や人形、舟形、陽物型木製品などが出土しており、城主による宗教行為と精神世界をかいま見ることができた。

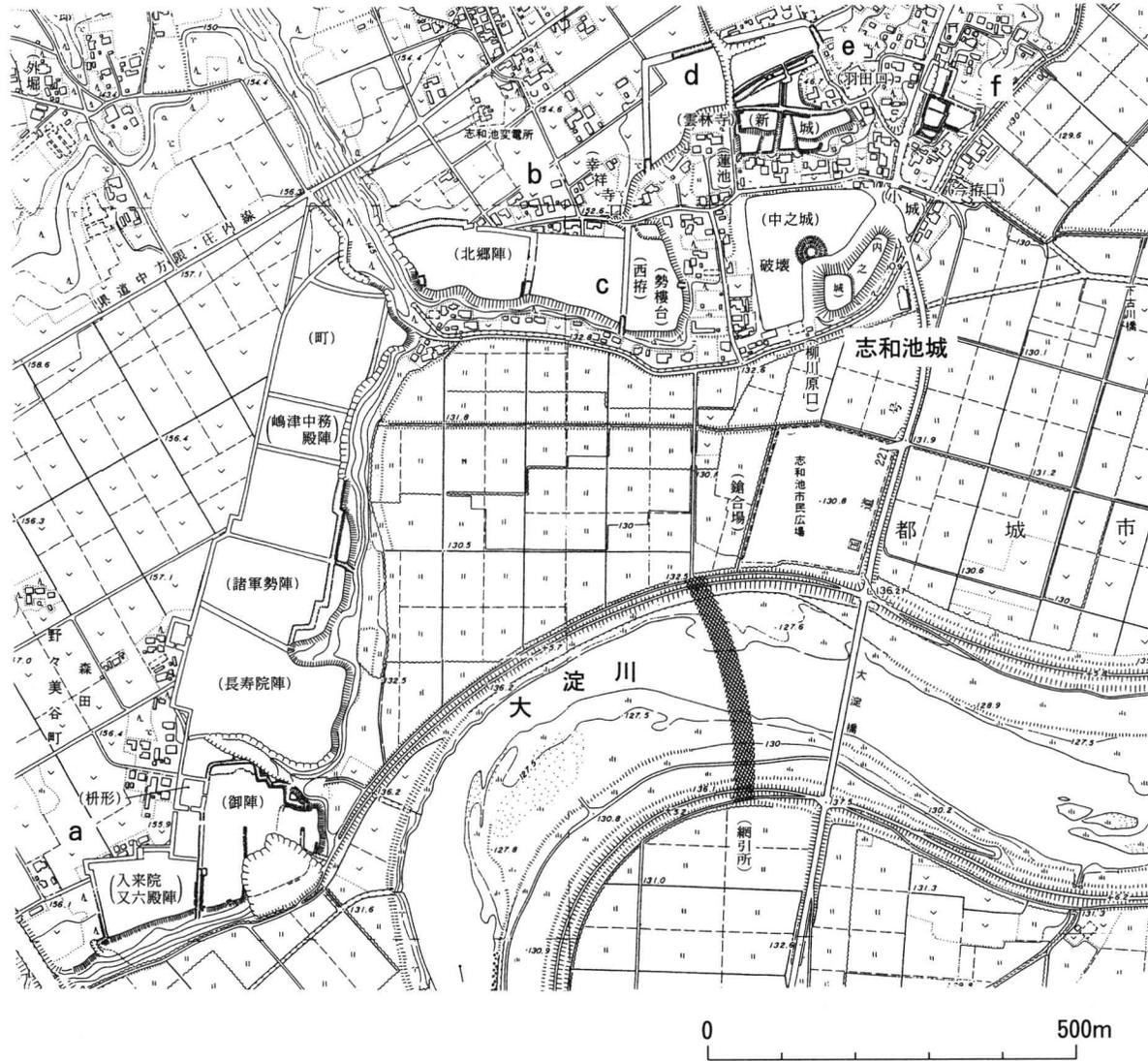


図5 鹿児島県森田陣と志和池城 (千田作図)

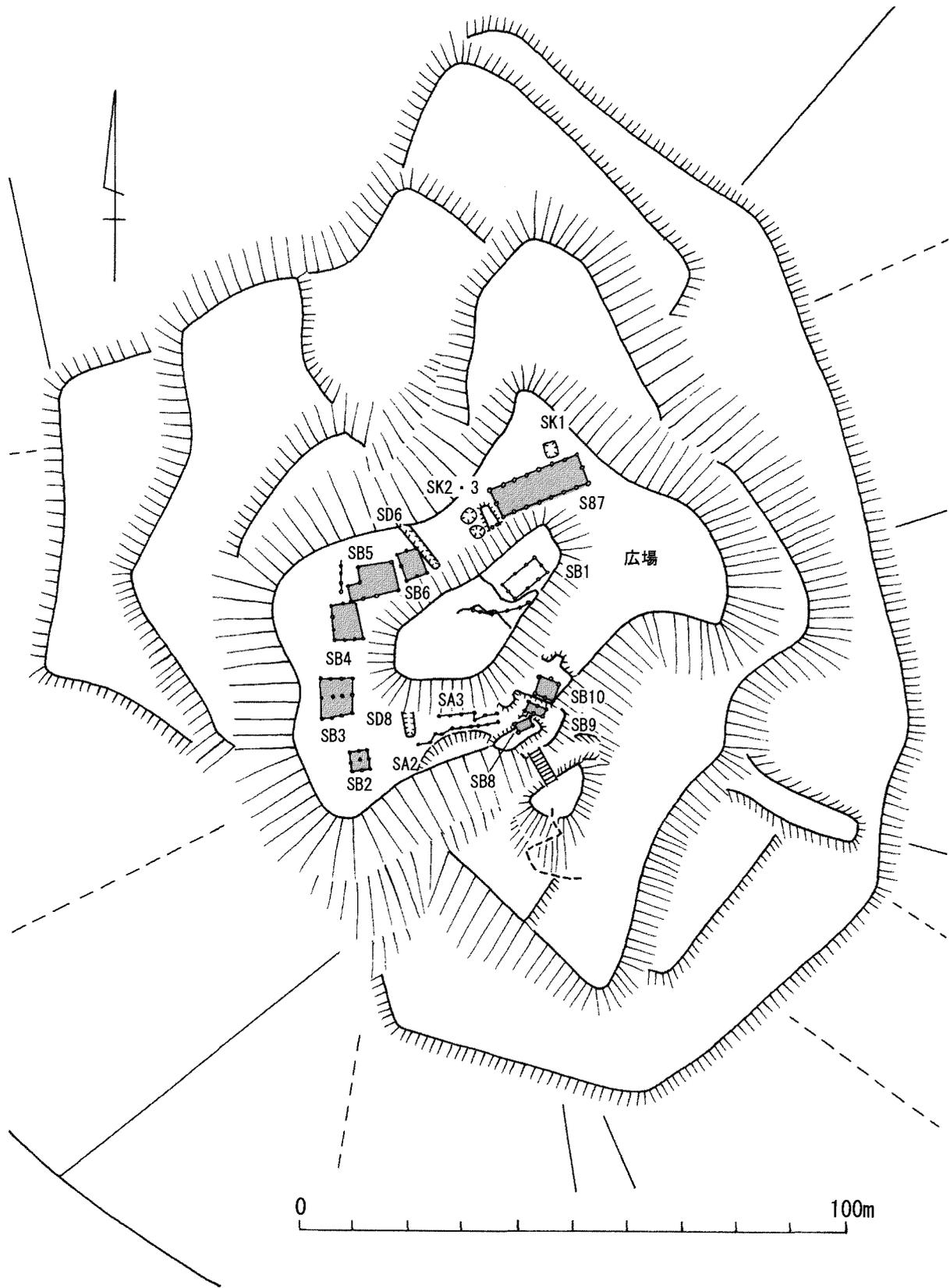


図6 高知県芳原城 ([松田1993・1995]によって合成作成)

ついで、松田直則によって丘陵上の中心曲輪群が発掘された〔松田1993・1995〕。この調査で丘陵上の主要な曲輪の構造が明らかになった。中心曲輪群の構造は比較的単純で、丘陵頂部を削平した主郭と、その周囲の帯曲輪によって中心部はできあがっていた。残念ながら山麓の曲輪は未調査であるが、山麓には城主居館や武家屋敷などがあったと推測される。遺物は15世紀末に遡るので、室町期に入って創築したことが確認できる。そして最終的なプランが完成したのは16世紀前半代であった。

主郭は自然地形に沿った楕円形で、南側に大きな空地を備えた。北端に2間×3間の掘立柱建物SB1をもった。建物と南側の空地とは、柵SA1によって区切った。主郭への出入りは、北側切岸裾に張り出した土塁上に2つの柱穴が確認できることから、土塁を最初の段として、さらに梯子状の階段を設置したと思われる。梯子はあるいは引きはずすことができるものだったかもしれない。いずれにせよ、主郭は日常の出入りの便がきわめて悪い構造で、そうした日常の便を優先的に考慮しなくてよい空間であったことがわかる。

主郭まわりの帯曲輪からは、9棟の掘立柱建物を発見している。帯曲輪南側では2間×2間と2間×3間の総柱建物、SB2・SB3が並んであった。ここから空闲地を挟んだ北側の帯曲輪西側には、SB4とSB5・SB6を近接して発見した。SB4はSB5との関係から考えて同時併存ではなく、時期的に先行した建物と思われる。

SB6の東側には堀SD6を掘削し、東側空間と区分していた。その東側には2つの廃棄土坑があり、内部から土師皿が大量に検出された。この2つの土坑は、主郭へ登る土塁を挟んで隣接した2間×7間という中心曲輪群では目を引く長大な建物SB7に伴ったと考えられる。SB7は、ほかの建物と比べて柱穴が深く、また柱筋の通りがひときわよく整ったことから、明らかに念入りに建てたものであったことがわかる。そしてこのSB7は、南東側に城内でもっとも大きい広場を伴った。

帯曲輪全体の出入り口は、南側および北側にあったと考えられる。北側は林道の掘削により失われ不明である。しかし主な出入り口であった南側については発掘によって具体像を知ることができる。芳原城中心部分の主出入り口は、以下のように組み立てられていた。

まず、山麓の曲輪から中心部に行くためには、ゆるやかに張り出した尾根先端の削平地に登った。その張り出し部は、中心曲輪群から堀切りで切り離されており、堀切りを木橋で渡って連絡した。木橋は、まっすぐ帯曲輪の端に建った櫓SB10直下の切岸に伸びていて、城兵は完全に制圧することができた。

木橋を渡りきると、そこから直角に東に曲がって、削り出された狭い通路を出入り口の下に進んだ。この通路は南側の深い堀切りと、北側の切り立った切岸の間に、かろうじて張り付いていた。通路の終わりに、いよいよ帯曲輪に入る出入り口があった。ここでふたたび北に折れて進んだが、右手と左手の土塁上にそれぞれ櫓SB10・SB8があり、さらに窪地になった出入り口には櫓門SB8があった。

櫓門SB8を超えると、正面には主郭切岸が立ちふさがった。道の東側は土塁とその上の櫓SB10によってふさがれていたから、西側にみたび折れて進んだ。その先は狭い通路部になっており、両脇の柵SA2・3が左右にそれることを防いだ。通路の終わりには区画堀SD8があり、帯曲輪の中心部をさらに守っていた。道を屈曲させ、おそらくSD8の西側にあった土塁を盾として、防射を行えるよ

うにしていたものと思われる。

南側出入口口とそれにつづく通路をめぐるプランは戦国期にふさわしい出来映えであった。そして一見単純に見えた芳原城の中心曲輪群を建物との関わりで読むと、南側の出入口口を起点とした時計回りの階層的な構成であったことがわかる。櫓門SB9からSD8までの防御空間、SB2・3による蔵の空間、SB5・SB6による居住空間、SB7による儀礼空間、SB1の詰城空間と評価できる。

発掘によって細かな空間設定と配置理論の全貌をつかむことができただけでも、芳原城の意義は大きい。しかしさらにこの城で注目されるのは、『長宗我部地検帳』の記載とつきあわせて検討可能なことである。戦国・織豊期に土佐国を治めた長宗我部氏が、豊臣大名化した後、大規模な検地を行ったことはよく知られている。その検地の結果は『長宗我部地検帳』として残され、当該期の土佐の都市・村落・城館を研究する基本史料となっている。

この芳原城も、城跡の荒地として1589年（天正17）に検地を受けた。地検帳には、ホノギ名として「詰ノタン（段）」、「北蔵ノタン」、「政所ノタン」、「弓場ノタン」、「北堀フチ」、「南二ノヘ」が記された。詰ノタンの位置は異論なくSB1の曲輪に比定できるが、それ以外のホノギ名も、松田が面積と検地の順番からの確に比定している〔松田1993〕。

それによれば北蔵ノタンが南の主出入口からSB2・3の総柱建物まで、政所ノタンがSB4・5・6・7と南東の空地まで、弓場ノタンを帯曲輪から北に張り出した派生尾根上の曲輪と位置づけられる。松田の復原以外に検地の順番とホノギの面積というふたつの条件を満たす位置比定の組み合わせがないので、確度は高い。

先に述べたように、ホノギ名を含め、地検帳の記載は芳原城が城として機能したときのものではない。しかし廃城から時を経ないときの呼称であり、城郭時代の各削平地の機能やイメージを反映した名称であったと考えられる。地検帳の呼称が城郭時代の削平地の機能や、そこにくらす人びとの感覚を反映したものであったことを証するものとして、北蔵ノタンにふれておきたい。北蔵ノタンは、芳原城の中心曲輪群の中では南端に位置しており、丘陵上を検地する段取りからはとうてい北と呼ぶことはできない。

しかし、芳原城全体での位置関係からこの部分を見直してみると、北蔵ノタンの北は、帯曲輪南側の主出入口口に見るように正面として意識され、密接に関連していた山麓の屋敷地から見た方角名であったことが理解される。つまり城郭が機能していた時期の人びとの空間感覚を色濃く投影した呼称であったことがはっきりするのである。

こうした位置比定を改めて検出された考古学情報と対比してみると、北蔵ノタンには、総柱で、倉庫と判定できる建物が所在した。また政所ノタンには2間×7間という特徴的な建物があったことがわかる。それぞれの建物を、呼称が示す空間機能を発揮したものと考えてよいだろう。

つまり詰の段（主郭）は、主に見張り所として機能しており、臨時の場合に備えた空地を広く備えた。基本的に限られた人間しか出入りすることはできず、遺物から見ても日常的には番のために少数の人間が詰めた空間であった。

帯曲輪は政所の段と北蔵の段とに分かれていた。政所の段の中心建物SB7は、桁行きが長く、細長い特殊な建築空間であった。北海道函館市の志苔館SB7〔田原ほか1986〕などとならんで、寝殿造りの主殿の系譜を引き、それを簡略化した建物と位置づけられる。こうした間取りは、桁行き方向

に多数の人が座って対面したり、会合したりするのに適していた。SB7脇の廃棄土坑SK2・3からは、合わせて2,111片もの土師皿片が出土している。SB7での儀礼で大量に土師皿を使用し、それを土坑に廃棄していったと解釈できる。

しかし、このことは芳原城内での儀礼がすべてSB7で行われたということを示すものではない。発掘はされていないが、山麓の居屋敷でも対面や儀礼を行ったことは間違いない。そうしたときに想起されるのが天文期以降全国的に大名の居所が山城を指向していったことで〔千田2003b〕、芳原城でもそれに追従するかたちで山城部の居城化が進行したと読み取れるのである。

室町・戦国期の武家儀礼の規範となったのは室町將軍邸での儀礼であったことはよく知られている。主殿での正式な対面儀礼と、園地とセットになった会所での人格的な儀礼との有機的な連関が、室町期の上級の武家屋敷の構成原理にさえなっていた。しかしこの芳原城をはじめ、中小の中世の城や館では、こうした規範にそのまま適合するような空間構成や建物プランにはなっていない。

さらに従来の議論では天文期以降に山城へ的大名の居所の変化があったことも考慮されていない。地形的な制約が厳しい山城では殿舎もまた平地とは異なったものとなったことが予測される。そしてもとより上級武家屋敷の建物プランをそのまま中小の城や館に当てはめて評価していくこと自体が、正しいとはいえない。中小の城や館では儀礼のあり方や建物プランが簡略化されたことを想定すべきである。考古学的にもっともよくわかっている福井県の一乗谷遺跡でも、大名である朝倉氏の館の空間構成原理が簡略化されて城下の武家屋敷では再構成されていたことがわかっている。

主殿や会所プランの変遷を追うことでわかることは確かにあるが、おびたしい数が存在した中世城郭で、いったいどれほどの城がそれに当てはまったのだろうか。「威信財」といった文化人類学の概念を借用した文化史的解釈だけでは、戦国期城郭の全体像という大きな枠組みからも、中国を源泉とした貿易陶磁の大きな枠組みからも〔亀井2003〕、十分な説明とはいえない。

発掘成果と城の全体構造、さらに『長我部地検帳』とを合わせた学融合的検討から、SB7は居住機能の強いSB5・6と役割を分担しつつ「政所」としての機能、つまりは戦国期の山城内での政庁機能を果たしたと評価できる。SB7は典型的な主殿建築を簡略化したものであるが、城内で正式な対面を行う主殿の機能をもった建物と想定することができる。具体的には城主がSB7建物の一方の端に座を占め、両側の柱に沿って横長に会合者が座る利用方法であったのではないだろうか。

これに対になった常御殿と会所としての機能を山城内で担ったのは、帯曲輪北西部に位置したSB5・6と考えられる。この周辺からは青磁や染付に加え、備前焼の搦鉢・壺・甕がもっとも多く出土していることと符合する。ただし先に述べたように上級武家屋敷の儀式をそのままここで行っていたと考えるべきではないだろう。基本的な原理は継承しながら、よりゆるやかで簡略化したものであり、土師皿の法量がそれぞれの型式で大・小程度にしか分化していないことは、考古学的にわかる簡略化の表れといえる。

## ⑧…………閉ざされた城内 / 開かれた城内

芳原城では、詰めの段が閉じられた空間としての色彩が強かったのに対して、詰めの段をとりまいた幅広の帯状の曲輪が一定程度開かれた空間として機能した。こうした城内の空間の使い分けは、

関東の戦国期文書からもしばしばうかがえる。たとえば1580年（天正8）足利義氏は古河城に掟書を下し、「敵方へ半手諸郷之者共、佐野門南木戸より内へ不可入事」と定めた。つまり敵方にも半年貢を納めている村々の住民を、佐野門南木戸より城内には入れてはならない、と命じている（『埼玉県史』資料編6）。城内のある部分までは、敵方の領主とも関係をもった者でも出入りできたことがわかる。

また1585年（天正13）に太田氏房は中城の車橋内戸張の番掟を決め、構えの番以外の者を曲輪内に入れてはならないと厳命している（『埼玉県史』資料編6）。戸張とあることから城域周縁部で、車橋とあるから、引き橋のように可動式で通行を随意に遮断できる橋を守ることに主眼があった曲輪かと推測される。

さらに後北条氏は厩橋（前橋）城の本堂曲輪について、城外との出入りには小田原城から派遣された番頭に相談の上、手形を発行して出入りを管理することを申し定めている（『小田原市史』史料編中世Ⅲ）。これも、特に防御の要となる曲輪の出入りを厳格に管理したことを示すものであり、番兵でなくともある程度出入りがあることを前提にした曲輪が城内に存在したことが理解できる。

芳原城の詰めの段とそれを一段下でとりまいた曲輪とは、まさに厳格に出入りを管理した空間と、ある程度地域住民に開かれた空間と読んでよい。詰めの段が高い切岸で囲まれ、出入りするには梯子を使用したと推測されることも、一般に出入りしない空間であったとすればまさに整合的に解釈できる。

芳原城では的確な発掘調査によって中心部の全貌が判明した上に、『長我部地検帳』という希有な史料に恵まれた。そして発掘成果と史料とを合わせた空間分析を深めることができた。こうした史料が揃うことは少ないが、芳原城での読みとりは、各地の城跡を検討する指標と位置づけてよいだろう。

## ⑨……………籠城の実態—兵舎を見つける—

つぎに戦いに遭遇した城がどのようなになっていたのかを発掘から見てみよう。近年、城に籠もることは藤木久志の研究によって特に注目されるようになってきた。しかし残念ながら発掘成果と連動するかたちで議論は深められていない。

この問題を考える上で、ひじょうに示唆的な城が、先に曲輪の造成でも取り上げた福島県の西方館である〔仲田1992〕。この山城は16世紀後半に機能した土豪層の詰城とされ、集落を見下ろす比高約100mの丘の上に占地し、規模は100m×50m程である。この山城は小さいながら主郭・副郭とそれらを囲む帯曲輪で構成されており、整った形態からも遺物が指し示す戦国期の姿であることは間違いない（図7）。

西山館では主郭（北郭）や副郭（南郭）の中心建物も興味深いですが、ここで注目したいのは帯曲輪に設けていたSB09～SB17、副郭のSI19～SI20、SX22等の簡易な建物群である。これらは自然地形に沿ってゆるやかに高くなる背後を切り込むか雨落ち溝を掘って建物の平面をつくり出したもので、柱間などは不規則だが、おおむね2間×1間から3間×1間程度の簡易な建物であった。短辺が1.5m～2m、長辺が4m～5m程度を測る。主郭・副郭の主要な建物とは明らかに構造が異なった簡

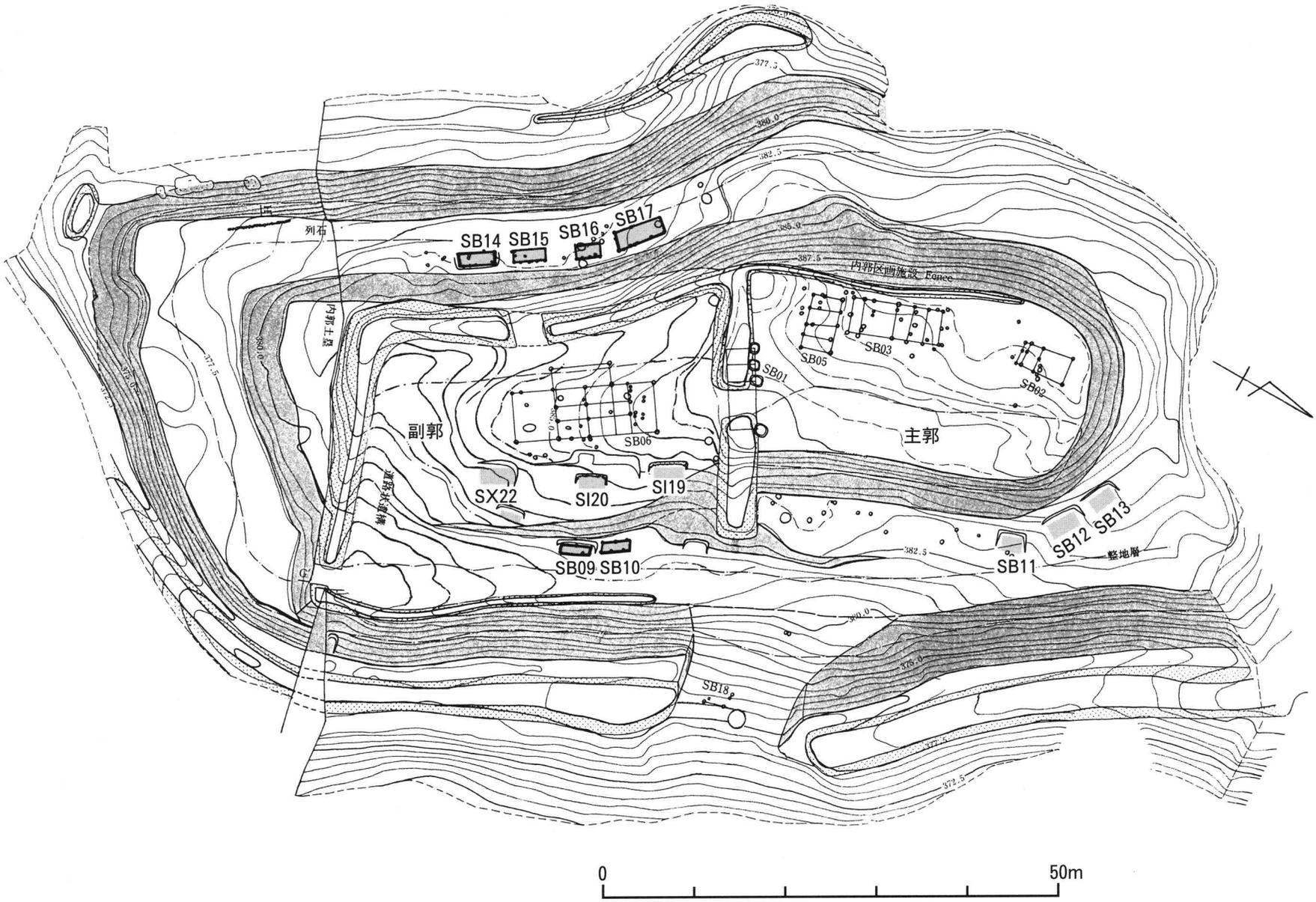


図7 福島県西山館（〔仲田1992〕に加筆）

便な施設で、城の攻防では真っ先に防御すべき帯曲輪もしくは壘線際に集中して設けていた。

これらは籠城に際して足軽層が寝泊まりした簡便な小屋掛けの建物で、いわばバラックの兵舎と第一義的には考えられる。そして場合によっては城とともに籠城した山麓の村人たちも寝泊まりした臨時施設と評価できる。帯曲輪の兵舎は内側の主郭もしくは副郭の壘線裾に寄せて建てられており、帯曲輪の外の壘線側は防御活動のための空気を確保したことが読みとれる。簡便なものではあっても組織的に建てたことを示す。

雨落ち溝が建物の背後と側面にしか残っていないことから片流れの屋根をもち、正面を開け放した建物と報告書では復原しているが、地形が下がっていく建物正面側は雨落ち溝などの痕跡が残りにくいことを考慮すべきだろう。開け放ちの建物では雨天時や居住の耐候性が低く、いくら監視には都合がよいとしても、そうとは考えにくい。基本的には四方に壁をもったと考えるべきだろう。

こうした建物群は、考古学から籠城の実像を明らかにするものである。西山館の全体構造との関係から読み解けば以下のように解釈できる。この山城の主郭は周囲の曲輪や櫓門などによってもっとも守られた部分ではあったが、ここは城主とその家族のための空間で、出入りを限定した空間と推測できる。それに対して副郭は、おそらく食料などを収蔵した下屋を備えたSBO6があり、帯曲輪の個々の簡易建物には煮炊きを行った痕跡がないことから、この副郭のSB06を中心とした部分が、食料の保管や調理、籠城中の人びとが会合するなどの中核的機能を果たしたと考えられる。副郭が籠城中の人びとに開かれたセンターであった。

そして籠城に際して主たる戦闘力を構成した雑兵クラスの人びと、もしくは避難してともに戦うために城内に入った人びとが寝起きしたのは主な曲輪をとりまいた帯曲輪の小屋掛け建物であった。主郭、副郭と帯曲輪とは同じ城とはいえ明確な階層性をもった。別の視点から見れば、帯曲輪とは人びとを収容し、城郭の防衛力を担った重要な空間であったと位置づけられる。

西山館から、籠城の実像を考えるには、主たる曲輪の建物だけでなく、帯曲輪など周辺の空間にあった簡易な建物にこそ目を向けるべきことがわかる。そして、西山館と同じ城郭周辺部の小屋掛け建物は、実は各地の発掘で検出されている。同じ福島県内では先に紹介した小野町の猪久保城、川俣町の河股城Ⅰ区などでも発見している〔高橋ほか2002：第1分冊60-70〕。

このうち河股城は南北1.2km×東西1.3kmにもおよぶ広大な城域をもった城とされている。何度かの修築があって重複したにせよ、中世城郭としてはあまりに大きすぎるといわなくてはならない。しかし河股城Ⅰ区など尾根筋の発掘区で検出した建物が西山館のような小屋掛け建物に限られたことをふまえれば、この城が城主による「核としての城郭」の周囲に、緩やかな小屋掛けの集合体ととりまいてできあがっていたと評価することができるようになる。こう解釈すれば、大きな城域の歴史的意義づけも可能になる。

西日本でも同様の小屋掛け建物は広く確認できる。たとえば先に土木工事の検討に取り上げた広島県の北谷山城の帯曲輪に見ることができる(図3)。主郭とその北側・西側の帯曲輪に長細い小屋掛け施設を確認できるほか、さらに削平が充分ではない一段低い帯曲輪状の空間に3棟ないしは4棟の小屋を確認できる。

主郭と一段したの帯曲輪までは壘線の切岸を整えており、東側の堀切との関係からも「核になる城郭」として整備された部分であったことがわかる。しかし最下段の小屋掛け建物が並んだ部分は

削平不十分で切岸も決まっていない。ここは緩斜面をわずかに削平したことでできており、主郭とその周囲の帯曲輪とは造成工事に明らかな違いが認められる。核になる城郭部と、最下段の空間とのそれぞれがかまどを備えたことから、城郭部に入った人びとと、周囲の空間に入った人びとの間には身分差があったことがうかがえる。それは武士身分の中の階層性を示したのかもしれないし、あるいは武士と城に避難しともに戦った民衆との違いを示すのかもしれない。

同じく広島県池田城の第3号建物もそう見てよいだろう。そして小屋掛けの簡易建物は福岡県の広幡城でも確認できる〔伊崎ほか1992〕。広幡城は畝状空堀群をもつこと、主郭塁線などに明確な折れや張り出しをもつことから、16世紀後半の山城であることが確実である。この城の調査では、主郭の周囲の斜面に切り込んだ簡易建物を検出している。この部分は堅堀で守られてはいるが、曲輪とも呼べないような斜面部であり、そうした不便で安全性が劣る場所に人びとが小屋掛けしていた実態を物語る（図8）。

広幡城の例はそれでも一応は城内の、尾根筋の連絡路に沿ったところでの小屋掛けであったが、同じく福岡県の観山城では主たる曲輪をとりまいた帯曲輪だけでなく、帯曲輪の外の斜面にまでそうした小屋掛けの兵舎を建てていたことが判明した〔吉村ほか1998〕。もとより調査区外になんらかの囲郭があって囲まれていた可能性が残されてはいるが、地形から見て城内とすることは困難である。もともと城を核に丘陵に占地して密集することで発揮される防御性はあったはずであり、こうした城と小屋掛けとの関係があってもよいだろう（図9）。

外郭内にはとはいえ城内にあった小屋掛けの簡易建物群の使用者と、観山城に見られたように城に近接していたとはいえ城外の簡易建物群の使用者とは、一見大きく異なるようにも見える。しかし「核となる城郭」とその外周部という関係性では一致している。外周部の危険度は戦況や城の性格（本拠・陣城など）で異なっており、一概に遺構からのみそれらを足軽層や避難した民衆というように主体を見分けてしまうことは慎むべきである。

観山城に見られた囲郭外の小屋掛けは、郭内的小屋掛けと比較すれば危険であった。しかしそこに敵方が攻めかかることは、もはや城を攻めていることと同じであり、防壁で囲まれていないにしても安易に攻め寄せられる場所ではなかったことも確かであろう。仮に避難小屋としても、村に留まることと比べればはるかに安全だったといえる。

ただだからといって領主はよろこんで地域住民を城内や城の周囲に避難させたと、発掘成果が証明したのではない。小屋掛けの建物群が避難のための施設であったことを示す明確な証拠はない上に、そこにははっきりと、より確実に守られた場所とそうではない場所の差異があり、中心と周縁との階層差があった。

そしてこうした発掘成果をふまえることで、改めて文書が記す城籠もりの解釈を見直し、新しい評価を下すことができるだろう。それは城と地域との関係を明らかにしていく新しい手がかりであり、こうした検討を重ねることで、文献に表れた「山小屋」や「百姓持ちの城」の実像に迫ることができるに違いない。

最後にその後の兵舎について瞥見しておこう。1587年（天正15）の肥後国衆一揆で一揆方の和仁氏が立て籠もった熊本県田中城では、城の山麓で6棟以上が整然と並び、長さは13mを超えた長大な簡易兵舎群を検出している〔黒田ほか1997〕。一揆方とはいえ足軽層の組織化が一層進んだことが

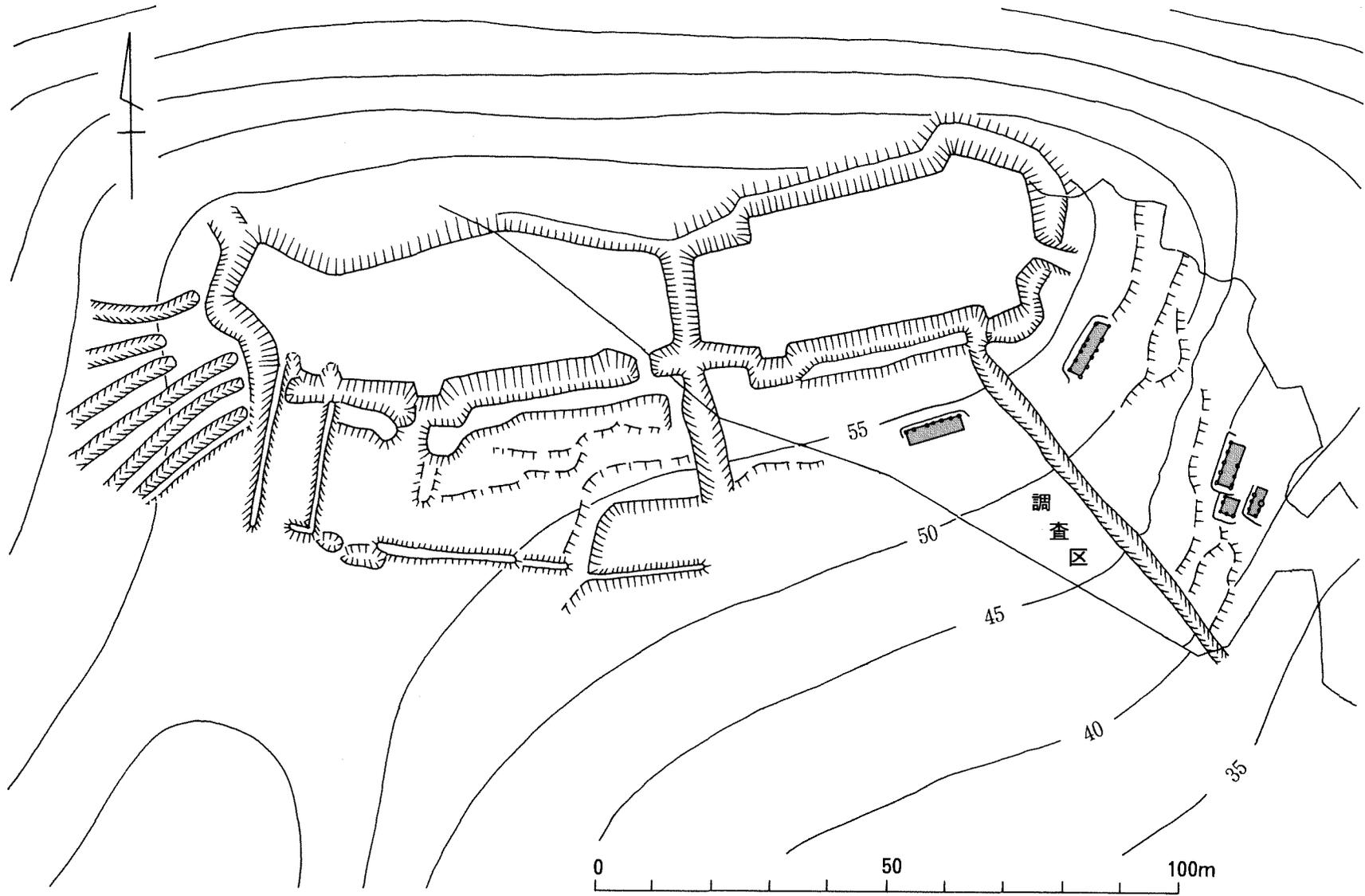


図8 福岡県広幡城の小屋掛け兵舎（〔山崎ほか1992〕をもとに作図）

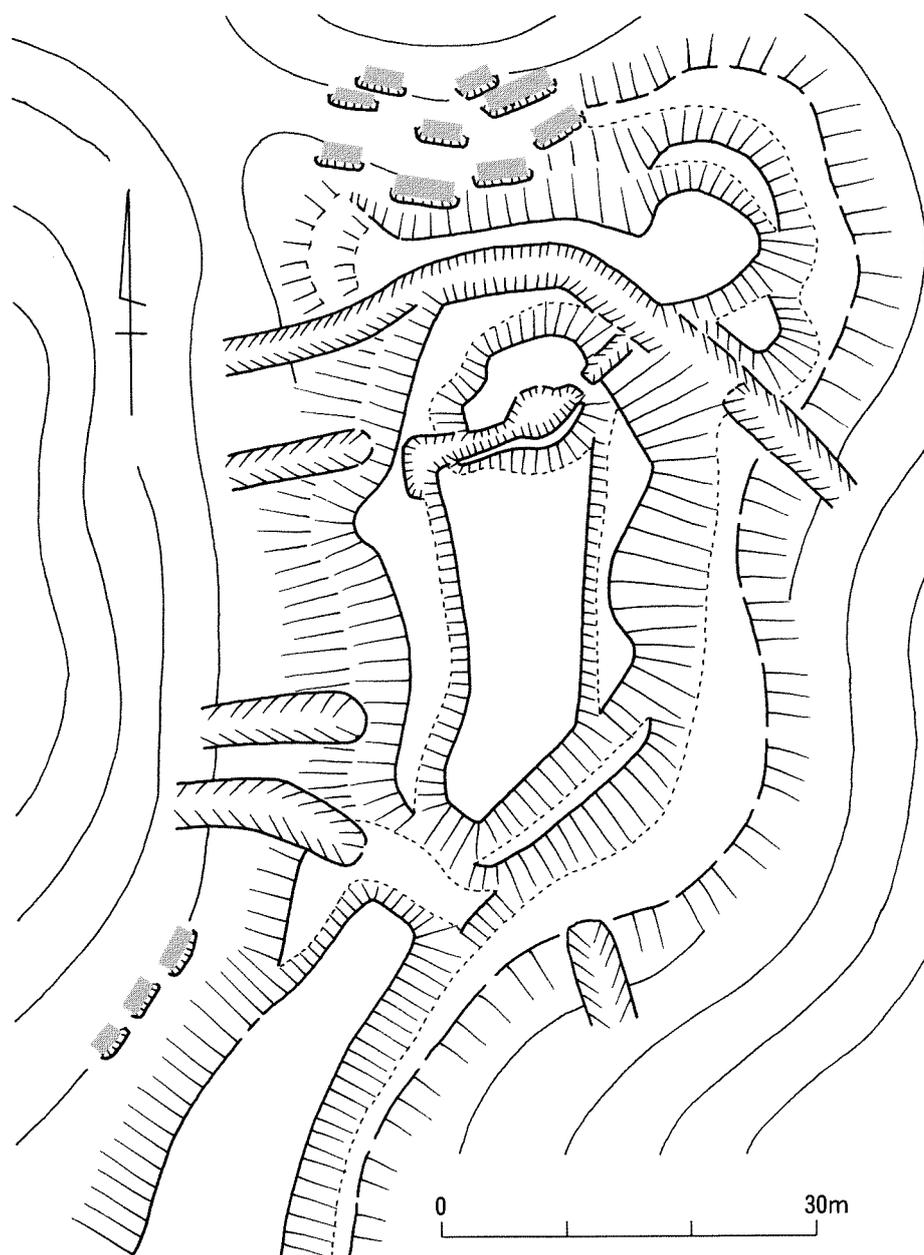


図9 福岡県観山城の小屋掛け兵舎 ([吉村1998]をもとに作図)

わかる。

さらに絵画資料で小屋掛けの兵舎を生き活きと描き出したのが1614年（慶長19）の大坂城攻めのような様子を描いた「大坂冬の陣図屏風模本」である。そこには田中城の兵舎群とも合致した近接して軒を接して立ち並ぶ兵舎を多数見ることができる。宮武正登が注目した「町屋作り」の陣であり、こうした陣のあり方が近世の大名屋敷を特徴づけた表長屋の原型になったのであった〔宮武2002〕。

## おわりに

城郭の空間分析を各地で実現することは、最初に述べたように城郭研究を新しい段階に導くことになる。城郭の防御施設のあり方から曲輪空間の序列を確認する。曲輪内部の建物群の配置と機能差をつかむ。それらによって城郭全体の構成と、内部空間の構成を一貫して把握していくのである。こうしたことなしに城郭を、地域においてどのような軍事的・政治的・社会的施設として機能したのか、これまで以上に深く位置づけていくことはできないだろう。

そして本稿で試みたように全体構造と内部構造把握による城郭の空間分析を進めることは、従来の地表面観察による城郭の資料化、もしくは城郭としての全体への位置づけを欠いた発掘成果の集積の限界を破ることである。こうした成果を積み重ねることで、城郭は地域史研究の資料として一層重要な位置を占めることができるのである。

## 参考文献

- 奥田壮紀ほか 1986『北谷山城発掘調査報告書』広島市教育委員会。  
 小都隆ほか 1977『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会。  
 小都隆・志田原重人 1984『行武城跡発掘調査報告』行武城跡発掘調査団。  
 亀井明德 2003「貿易陶器研究の今日的課題」前川要編『中世総合資料学の提唱』新人物往来社。  
 栗山伸司ほか 2000『長野城』北九州市教育委員会。  
 黒田裕司ほか 1997『田中城跡XII』三加和町教育委員会。  
 千田嘉博 1991「中世城館研究の構想」石井 進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社、のちに加筆して〔千田2000〕に収録。  
 1998「志波池城・森田陣」『都城の中世城館』都城市教育委員会。  
 1999「フランス アレシアとカエサル包囲陣」『考古学研究』第45巻第4号。  
 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会。  
 2002「城郭研究の行方」『攻撃と防御の軌跡』人類にとって戦いととは・第4巻、東洋書林。  
 2003a「中世城郭の研究」前川 要編『中世総合資料学の提唱』新人物往来社。  
 2003b『戦国の城を歩く』筑摩書房。  
 千田嘉博・小島道裕・前川 要 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社。  
 高橋圭次ほか 2002『河股城発掘調査報告書』川俣町教育委員会。  
 宅間一之・出原恵三 1984『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会。  
 多田暢久 1989「陣城プランの特徴について」『近江の城』第32号、近江の城友の会。  
 田原良信ほか 1986『史跡志苔館跡』函館市教育委員会。  
 仲田茂司ほか 1992『西方館』三春町教育委員会。  
 広本喜穂ほか 1989『伴東城跡発掘調査報告』広島市教育委員会。  
 振井久之 1992『尼子氏陣所跡発掘調査報告書』大和村教育委員会。  
 松田直則 1993『芳原城跡II』春野町教育委員会。  
 1995『芳原城跡III』春野町教育委員会。  
 宮武正登 1997「文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）における大名陣跡の諸形態(1)」『研究紀要』第3集、佐賀県立名護屋城博

---

物館。

1998「文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）における大名陣跡の諸形態(2)」『研究紀要』第3集，佐賀県立名護屋城博物館。

2002「陣」を再考する』『歴博』第114号，国立歴史民俗博物館。

村田修三編1987『図説中世城郭研究論集』第1－第3巻，新人物往来社。

山崎俊秋ほか 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告9・広幡城跡』福岡県教育委員会。

吉村靖徳 1998『穴田古墳群・観山城跡』福岡県教育委員会。

Reddé M.・Schnurbein S. et. 1995, Neue Ausgrabungen und Forschungen zu den Belagerungswerken Caesars um Alesia (1991-1994), *Bericht der Römisch-Germanischen Kommission* 76, Verlag Philipp von Zabern.

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年3月3日受理，2003年5月9日審査終了)

---

## **Composition of Space in Castles in the Sengoku Period**

SENDA, Yoshihiro

Research on castles in Japan has seen the completion of the stage of the accumulation of information on their basic location and details about their remains, and has entered a new stage in which new historical research can be initiated on the basis of these results. In the past, it has been not uncommon for research into castles to be undertaken separately, despite the best efforts of the lay researchers who were largely concerned with above-ground observations for their private research, and those of the government researchers who have undertaken archeological research.

However, in order to advance research using materials from castle ruins it is necessary to translate the military implications from the above-ground observation of castles into historical materials and translate information on the inner composition of castles gained from excavations into historical materials, and then analyze these data accordingly. It is also important that excavation findings be used to paint a fresh picture of castles from the Middle Ages.

This paper presents specific examples that show how to interpret the composition of space within castles through castle building techniques, the relationship between the shape of a castle and its internal structure, and battles, on the basis of the internal structures of medium-sized and small castles that have come to light through excavations.